

Ⅲ. 児童生徒質問紙調査結果の分析

①基本的な生活習慣等

令和3年度と比較すると、「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」の質問で、肯定的な回答が小学校において大幅な増加、中学校において大幅な減少が見られた。その他の質問では、大きな変化は見られない。対象生徒が小学校6年生であった平成31年度との比較においては、寝る時間、起きる時間ともに減少が見られた。小学生と中学生の生活スタイルの変化が大きな要因として考えられる。

新規質問である「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などしますか」では、小学生の約5割が、また中学生の約8割が1時間以上SNSや動画視聴などを行っていることが明らかとなった。

基本的な生活習慣の確立は、子どもがよりよく成長していく上で重要であり、特に、栄養・睡眠・運動の3つの要素は非常に大切である。児童生徒が、基本的な生活習慣等自らの生活について自覚するとともに、学校と家庭が協力することや保護者がその重要性を理解することが大切である。

②挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等

令和3年度と比較すると「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」の中学校の肯定的回答が大きく増加している。その他の質問は小中学生ともに、大幅な増減は見られなかった。対象生徒が小学校6年生であった平成31年度との比較では、「挑戦心」や「自己有用感」の質問で、大幅な減少が見られる。また、新規質問である「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」は小学校で約9割、中学校で約8割、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」では、小中学校とも約7割と、大阪府や全国とほぼ同様の肯定率を示している。

自己有用感は幼少期からの様々な体験や、成就感、達成感等を味わうことにより育まれるものである。引き続き、先生、保護者や地域と連携し、児童生徒一人ひとりを大切にし、関わるのが重要である。

学校生活や社会生活を営む上で、規範意識を身につけることは必要不可欠である。学校の日々の取り組みや、家庭、地域との連携を図ることにより、児童生徒の理解の促進や意識改革に取り組むことが重要である。学校のみならず、家庭、地域の大人が現状をしっかりと認識し、率先して規範意識を守ることの大切さを子どもに示すことが必要である。

これまでと同様に学校や家庭において、他者との関わりの中で、自分の役割を果たすことで周りから感謝されたり、達成感を味わったりする機会を充実させていくことが大切である。

③学習習慣、学習環境等

「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日

から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」、「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」といった家庭学習に関する質問で小中学校ともに減少傾向が見られた。今回の調査結果から、家庭学習における課題が明らかとなった。小中学校とも計画的な学習については、家庭での自主学習等を促すなど取組みを進めているが、今後さらなる工夫を行う必要がある。令和3年度調査ではなかった「読書は好きですか」の質問では、小学校で約7割、中学校で約6割の児童生徒が肯定的回答を示している。児童生徒質問紙と教科によるクロス集計では、「新聞を読んでいますか」や「読書は好きですか」の質問において、肯定的な回答している児童生徒の方が、得点率が高い傾向が見られる。家庭や地域と連携を図りながら、「読む」機会の充実を図っていきたいと考える。

④地域や社会に関わる活動の状況等

「今住んでいる地域の行事に参加していますか」、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることはありますか」の質問については、前回調査で減少した令和3年度調査から若干の増減はあるが、大幅な変化はなかった。

新型コロナウイルス感染症拡大以来、地域の行事が中止になったり、学校行事においても地域の方々と交流する機会が減少したりした。しかしながら、各校において、「どうすればできるのか」「自分達には何ができるか」と様々な工夫を行い、子どもたち自身が自分事として地域や社会のことを考え取り組んでいる。今後もあらゆる教育活動の中で、発達段階に応じて、地域や社会の一員としての自覚を育てていく必要がある。

新規質問である「自然の中で遊ぶことや自然観察をすることがありますか」の質問では、小学校で約7割、中学校で約6割、「地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがありますか」の質問では、小学校で約3割、中学校で約2割の児童生徒が肯定的な回答を示している。地域のことを考えるきっかけとして、地域の人たちと出会う機会を、学校のみならず地域や学校とともに模索していくことが必要だと考える。

⑤ICTを活用した学習状況

これまでに受けた授業で、コンピュータなどのICT機器を週1回以上使用したと回答した割合は昨年度より30ポイント近い増加があり、授業におけるICT機器の活用機会は大幅に増加したことがわかる。新規質問である「自分で調べる場面」、「友達と意見を交換する場面」、「自分の考えをまとめ、発表する場面」といった様々な場面でICT機器が活用され、令和3年度調査でも高い肯定率であった「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」の質問は継続して高い肯定率を示している。GIGAスクール構想に伴って配備されたクロームブックの活用が、令和2年度の3学期から始まり、小中学校において全ての教育活動で活用方法を模索し、全ての学習の基盤となる資質・能力とされる情報活用能力の育成のために、どの教科のどの場面で活用することが効

果的なのかを研究し、実践した成果を見てとることができる。

⑥主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

小中学校ともにすべての質問において、令和3年度と比較し肯定的回答は増加している。特に中学校において、「1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか」、「1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の質問で大幅な増加が見られた。また、新規の質問であった「5年生までに（1、2年生のときに）受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」、「5年生までに（1、2年生のときに）受けた授業では、自分の思いや考えをもとに、作品や作文など新しいものを創り出す活動を行っていましたか」においても小学校で約6割から7割、中学校で約7割から8割の高い肯定率を示している。

これらの結果から、各校において、めあてを明確にし、対話を通して学びを深め、振り返りにより自分の学びを確認することを大切にし、授業改善を進めてきた成果が確実にあらわれつつあると考える。また、学習活動において、子どもたち自身も教科横断的な視点を持ちながら取り組んでいる様子をうかがうことができた。

今後も、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、各校での校内研究や熊取町における教職員研修を充実させ、より一層、授業の工夫改善に取り組むことが必要である。

⑦総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳

令和3年度と比較すると小中学校ともに各質問において、肯定的な回答に大幅な増加が見られた。「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」や「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」の質問内容は、総合的な学習の時間や道徳の授業だけでなく、日々の授業の中でも取り組んでいる内容である。それらの時間や授業が、効果的に相互作用している結果だと考える。今後も、学級で充実した話し合いができる環境整備を行い、課題解決に向け、あきらめずに取り組む姿勢を育てていきたい。

⑧学習に関する興味・関心や授業の理解度等

国語に関して、小学校では「国語の学習は好き」の割合に大幅な増加が見られたが、その他の質問では大きな変化はなかった。一方、中学校ではすべての質問で大幅な増加が見られた。算数・数学においては、小学校で大幅な減少が見られた質問があったが、中学校では大きな変化は見られなかった。しかしながら、平成31年度調査と比較すると、各質問で大幅な減少が見られる。小学校から中学校への接続にあたり、系統立てた指導の充実をはかるな

ど、学びの連続性を意識した取組みを模索していきたい。

今年度実施された理科においては、小学校で約8割、中学校で約7割の児童生徒が「理科の勉強は好き」と回答している。また、「理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか」や「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」においても、全国や大阪府との比較の中では高い肯定率を示している。今後も、日常生活とのつながりを意識した授業づくりを行っていきたい。

いずれの教科においても、「好き」、「大切」などの質問において、肯定的な回答をした児童・生徒の方が正答率が高い結果が見られた。それぞれの教科の持つ特性を生かしながら「主体的・対話的、深い学び」を実現していきたい。